

半世紀

牧師 水草修治

「これでわた飴を買うといで。」と、母が大きな五十円玉を握らせてくれた。当時の五十円はニッケル貨で小学一年生の手にはずっしり重かった。少年時代をすごした神戸の須磨寺町では毎月「おだいしさん」と呼ばれる祭りがあったが、その日は桜が満開で、参道に並ぶ露天商の前を人波が流れていた。

わた飴屋に向かう途中、木綿の白い軍服に一本足の兵隊さんが松葉杖にもたれながらアコーディオンを奏でていた。「ここはお国の何百里・・・」という軍歌らしからぬ悲しいメロディだった。兵隊さんの前には缶があって、少し十円玉などがはいつていた。アコーディオンの音色が胸にしみたのか、つい立ち止まってしまって、五十円玉を入れてしまった。ガチャン。重いニッケル貨は大きな音を立てた。兵隊さんは少し頭をさげてアコーディオンをひきつづけた。なんだか、良いことをしたのか悪いことをしたのかわからない気持ちで、手ぶらで家に帰った。「それは傷痍軍人というんよ。もうあの戦争から何年もたつけどねえ」と母は言った。ほめられもせず、怒られもしなかった。思い返せば、母のことばには気の毒だという気持ちと、もう立ち直ってほしいという気持ちがにじんできたのだろう。

「半世紀」などと大げさな題をつけてしまったが、四月、筆者は五十歳になった。一九五八年(昭和三三年)生まれである。前々年の経済白書に「もはや戦後ではない」と記されたように、朝鮮特需で日本の経済復興は目覚しく、おおよけには戦後ではなくなっていたのだが、なお戦争の傷のいえない人々はいたのである。筆者は、戦争の残り香をかいた最後の世代ということになるのだろう。

ここ十年、自衛隊の入隊競争率がとても高くなっているそうである。若者の危機感や「愛国心」が急に高まったのか。いや、高くなった最大の理由は「ネットカフェ難民」に象徴される大量の若者の生活難であろう。

米軍兵士に占める貧しい有色人種の割合は、一般企業の社員に占めるその割合よりもずっと高い。徴兵制がなくても多くの若者を生活難という状況に置けば、そこから志願兵を得られるという仕組みである。わが国でも「規制緩和」の結果、米国社会と似た格差構造になって、自衛隊入隊者が増えたわけである。規制緩和＝無法化とは、経済活動の弱肉強食化を意味するから、富む者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるのは必然である。

十年ほど前までは閣僚が憲法九条に批判めいたことをいえば、公務員の憲法擁護尊重義務(九十九条)に反するという事で更迭されたものだが、今はまるで空気が異なっている。しかし、これでよいのか。

旧約聖書にはイスラエルの民の歴史が記されているが、そこには「四十年」という数字がしばしば見える。四十年とは世代交代を意味する年数である。ある世代が過ちを犯し、神からの厳しい懲らしめを受けた後、四十年もたつと、次の世代はその過去の苦い記憶を忘却して、またも同じ過ちを犯し、また罰を受けるということを繰り返したのである。わが国は、最短で二年後には改憲に進もうとしている。私たちは、この二年間、誠実に過去のことを学び直す責任があるのではなからうか。「ここはお国の何百里・・・」という軍歌「戦友」は、実は反戦歌であったという。

アブラハムの生涯

出直し

幸運と絶望

妻サライが宮廷に召しいれられてまもなく、エジプト王ファラオからアブラムに屋敷と多額の富が下賜され、きのうまで難民だったアブラムは、にわかに多くの家畜を持つ大金持ちになりました。エジプト人たちは、「美人の妹のおかげでお大尽。なんと幸運な人よ。」とうらやましがりましたが、アブラム自身はそうはいきません。

「いったい誰のために、わしが妻サライを王にくれてやったと思っている。一族のためではないか。なのに、みんなでわしをばかにしおって。貴様もわしを臆病者と心の中で笑っておるのだろう。」

アブラムはしもベエリエゼルに、そんな言葉を投げつけました。アブラムにしてみれば、飢えに瀕しこの地にのがれてきた一族が生き延びるためにこそ、自分は妻を妹と偽り彼女が大奥に連れて行かれるままにしたのです。ところが、その結果、これまで尊敬の目で見られていた一族の者たちが、今は自分を軽く見るようになったように感じられたのです。しもべたちが小声で話していると自分のことを噂しているように思え、笑い声が聞こえると、みんなして自分のことをあざわらっているように思えてならないのです。「ご主人と来たら、いのち欲しさに、奥さんを大奥にやっちゃったんだよ。情けない男だねえ。」と。

アブラムは真っ昼間からファラオから届いた最高級の酒を飲んでも、彼の舌には苦いものでした。夜がふけて床に着けば「今ごろサライはファラオの宮廷で何をしているのか・・・。」と想像すると、アブラムは激しい嫉妬と怒りで胸をかきむしりました。しかし、彼にはどうすることもできませんでした。神の約束を捨ててこの地にのがれて来たアブラムには、自分で立ち直る力も、妻を奪い返す手立てもなかったのです。入れた日からたいへんなことになっていました。女房たちがいっせいにからだに変調をきたして、月の物が

止まらなくなって枕を並べて寝込んでしまったのです。彼女たちはエジプト王の世継ぎを生み出すべき器ですから、ことは深刻でした。

ファラオの命令で宮廷の侍医が調べに入りましたが原因は不明です。ただ不思議なことに、ごく最近召しいれたアブラムの妹サライという女だけは、この病にかからずにいることが判明したのです。

ファラオはこれは何かあると、ピンと来ました。そしてサラに事情を問いました。

「そのほう、何か余に隠し事があるであろう。悪いようにはせぬ。話してみよ。」

ファラオのことばに促されて、サライはことの次第を話しました。アブラムは特別に神に約束を与えられた人であり、自分は実はアブラムの妻であること、そして、このたびの宮廷での災疫は、サライの身を守るために、アブラムの信じる主なる神が起こしたものであると思われること。また、アブラムに害を加える者には、神は害を加え、アブラムを祝福する者を神は祝福なさるといふ約束のことばが与えられていることなどを。

エジプト王は、宮廷を襲った災厄が神の御手によると知っておののき、アブラムを呼びつけて怒りに満ちた口調で言いました。

「そちは余になんということをしてくれたのだ。なぜサラがそちの妻であると告げず、そちの妹であると言ったのか。だから、余はサラをわが妻として召しいれてしまったではないか。そのせいで、余の宮廷は恐るべき神罰をこうむってしまった。

さあ、もうたくさんだ。アブラム。一族郎党ひきつれてこのエジプトから立ち去るがよい。」

こうしてアブラムはエジプトを去ります。しかも神からの災厄をおそれたファラオは、アブラムに与えた財産には指一本触れることなく、彼をエジプトから立ち去らせたのです。

出直し

カナンへの路をたどりながら、アブラムは胸の内をつぶやきました。『いったい、自分は何をしてきたのか。長年連れ添った妻を差し出して、身を守ろうとしたとは。』そのつぶやきは、やがて祈りに変わっていきます。「主よ。私はいつどこで道を間違えたのでしょうか。」

約束の地カナンに到着したとき、アブラムは主なる神の前に祭壇を築き、礼拝をささげました。そして、神に導かれてこの地まで来たアブラムは、これからも神のみことばに従うことを誓ったのでした。ところが、約束の地での生活に慣れるうちに、アブラムはなにかと忙しく神に礼拝する生活をおろそかにするようになりました。その頃、飢饉がこの地を襲いました。アブラムは慌てふためいて神にうかがいを立てることもせず、また神の約束も忘れ、この地の人々と同じようにエジプトに下ってしまったのでした。神のみこころを尋ねず、この世の人々の知恵にしたがった時、アブラムは過ちを犯したのでした。

そこで、アブラムは、カナン地の南部ネゲブに到着しても、そこに留まらず、さらに旅を続けて、北のベテルまでやってきました。「そこは彼が最初に築いた祭壇の場所である。

そのところでアブラムは、主の御名によって祈った。」とあります。アブラムは原点に立ち返って、出直すことに決めたのでした。神とともに始めた新しい人生の旅でしたのに、神のことばを待たず、自分勝手に先走ってあやまちを犯し、長年連れ添ったたいせつな妻を裏切ってしまったのですから、最初的时候に戻って出直すほかありません。

アブラムは祭壇の前にひれ伏して、長く長く祈りました。「主よ。私はあなたの約束を捨て、妻を裏切り、大きな罪を犯しました。それにもかかわらず、あなたは私をあわれんで妻を救い、我らをこの地に戻してくださいました。」悔い改めの涙が地をぬらしました。

長い祈りが終わって立ち上がったアブラムの胸のうちには平安と喜びが満ちていました。忙しさにかまけて、礼拝をおろそかにしているうちに失ってしまっていたあの平安でした。神とともに生き始めたときに与えられたあの喜びでした。

ふり返ると、そこにサライがいました。彼女の目も濡れていました。アブラムは言いました。「サライ。すまない。出直したいのだ。」

アブラムの妻は微笑んで、静かにうなずきました。